



四 お笑いバージョン

はいはい、こちらこそ、ありがとうございます。でも、「ありがとう」なんて言われると、つい、心がワクワクしちゃうな。それでまた、性懲りもなく指名して、ドリンクもいくら頼んでもいいよなんて大見えを切って、財布の中のお金に羽を生やしちゃうんだろなあ。この手の商売は、人間の心理を上手く突いているよ。まあ、それでもさっきの極道よりましだ。

だけど、本質的には、どちらも同じかもしれないな。片方は脅して、片方は誉めて、心を揺れさせることで、相手を自分の意のままに動かそうとするビジネスモデルなんだ。それにしても、自分は癒されたのか、相手に適当にあしらわれたのかよくわからないな。どちらにせよ、楽しい思いをしたのは相手の方で、俺は惨めな生活を披露しただけだった。まあ、それでもいいか。なんだか、俺の気持ちが上がったり、下がったりとジェットコースター化しているぞ。さあ、気を取り直して、次のバージョンへ進もう。今度は、やっぱりお笑いだ。笑って、笑って、笑って、今までの気分を吹き飛ばしてやる。それ、クリック。

画面に出てきたのは、嫌味な笑いをした男。年の頃は三十ぐらいか。メガネはキツネの目のように吊り上がり、その奥からの視線は、キツネの癖に人を小馬鹿にした感情が浮かんでいる。しまった。これも、失敗したのかな？

「あなた、相変わらずセンスの悪い服を着ていますね。それに、その髪は何ですか。茶髪？笑っちゃいますよ。今頃、茶髪だなんて、流行りませんよ。髪だって長く伸ばして、団塊の世代の青春時代じゃないんですからね。見栄えだけど反抗しても意味がないですよ」

やはり、第一印象どおりだ。俺が笑うんじゃないくて、相手にいきなり笑われちゃった。それにしても、画面から俺のことが見えるのか。そんな訳はないだろう。だって、これは……。

「目で見えることが全てではありませんよ。あなたの考えていることからあなたの服装ぐらいわかりますよ。それに、今までの対応はなんですか。ヤクザやキャバクラ嬢相手に、一体、なんていう会話をしているんですか。そんなことだから、ヤクザにもキャバクラ嬢にも相手にされないんですよ。笑っちゃいますよ」

おいおい、俺を笑わしてくれるんじゃないくて、やっぱり俺を笑うのか、このバージョンは？

「おや、あなたは笑いたいんですか。はっはっはっはっ。笑わしてくれるなんて、十年。いや百年早いですよ。全ての事柄には、なんでも下積みが必要です。毎日、五分とか、十分とか、自分の目標に向かって、腕立て伏せとか、匍匐前進とか、少しでも努力しなければいけませんよ。ただ布団の中で毛布にくるまって、待っているだけでは駄目ですよ。最近は、ファーストフード

だかなんかが流行って、お笑いにまで手っとり早さを求めるから困るんです。うわつつらの笑いなんか、ポットから出る蒸気のように一瞬で消えてしまい、後は何も残らないじゃないですか。本当のお笑いとは、お茶を飲んだ後、じわじわと込み上げてくるような渋さこそが大事なんです。ああ、あれが、本当のお茶の上手さなんだ、笑いの真髄なんだと気付くのです。笑いを取るためには、日々の精進、漬物の石にならないといけません」

なんだ、こいつは。例えば滅茶苦茶で、苦みばかりで、うま味が感じられないぞ。これが本当のお笑いなのか。これじゃあ座布団どころか、黄色いハンカチも出せないぞ。

「それなのに、最近の若い奴ときたら、お笑いがどういうものなのか全く知らなすぎますね。まずは自分が笑われてこそ、初めて真のお笑いが解るんですよ。笑われた時の、この屈辱感、穴があったら体全部が入らなくても、せめて顔だけでも隠したい、この心境を体得しなくちゃなりません。例えば、かくれんぼで鬼に見つかって、お尻が見えているからすぐにわかったよと言われてたら、へへへへと頭をかき、ついでにおならのガスを一発かますぐらいの芸をしなければいけません。

もし、できるならば、穴に頭じゃなくしてお尻を隠し、見つけられたときに、「お尻隠して、頭隠さず」なんて、ジョークを言い放ち、お尻をかきながら、そっと、ズボンをおろせば、そこには、目、鼻、口が描かれていて、腹芸じゃなく尻芸まで見せるぐらいのことをやらないといけません。笑いは連鎖反応です。次々とネタを機関銃のように繰り出し、お客様の笑いの火薬を次々と爆発させなければならぬんです。一発芸ではダメです。百発芸ぐらいをかます勢いでないと。

そのためには、千の風に乗るぐらいのネタが必要です。一つの受ける笑いのすぐ側には、数十、数百のお笑いのネタのお墓があるのです。そんなお墓の前で泣く必要はありません。そのお笑いの屍の向こう側には、栄光の虹色のお笑いの橋があるのです。まだ、あなたは、そのお笑いの橋のたもとにいただけです。さあ、私と一緒に、お笑いの橋を端ではなく、箸を持った気分で、正々堂々と真ん中を歩きませんか。お笑いの道に終わりはありません。永遠に続くお笑い道を極めましょう。そして、真のお笑い芸人になりましょう」

おいおい、何がお笑い芸人だ。俺は、そんなものにはなりたくない。このコースは、お笑い芸人育成講座か？それに、相手の言っていることは、単なる変態だ。大学生の飲み会の一発芸の延長じゃないか。さっきから、繰り返し言っているように、俺は笑われたいんじゃない、笑いたいんだよ。いいかげんにしろ。

「おやおや。怒っちゃあいけません。ゲーム相手に感情むき出しなんて、どうもいけませんね。まだまだお笑いの修行が足りませんよ。ですから、笑いというものは……」

もういい。何だ、このゲームは。さっきからやっているけれど、ヤクザにしろ、キャバ嬢にしろ、このキツネ眼の男にしろ、相手にしていると泣きそうになるよ。そうだ、今度は泣いてやる。泣いて、泣いて、ひとしきり泣いてやるぞ。最近、涙なんか流したことがないからな。パソコンやスマホなど、液晶画面の見過ぎで、ドライアイになっているせいかな。現代社会の機器環境は感情に影響を与えるんだ。うん、いいことに気が付いたぞ。今度、論文を書いて、学会で発表してみるか。それにしても、さっきから文句を言いすぎて、目だけでなく口の中や喉がカラカラだ。せめてこの世知辛い世の中だけど、心ぐらい潤してみるか。クリック、OK。